

猟犬の「変身」

—宮崎県椎葉村における猟師と猟犬のコンタクト・ゾーン(接触領域)に着目して

合原織部

<要旨>

本稿の目的は、宮崎県椎葉村を対象に、猟師と猟犬との種=横断的交渉のあり方を、日常生活が営まれる里の領域と、狩猟が実践される山の領域の異なる位相から考察することを通じて、各位相に特徴づけられる主体性の相互構築のあり方を検討することにある。九州山間部の狩猟文化を対象とし、猟犬に着目した従来の民俗学研究は、当該地域の狩猟において猟犬がきわめて重要な役割を担うことを指摘してきた。しかし、これらの研究は、狩猟(狩猟伝承)という文脈に限定して猟犬の役割を論じるため、日常生活における猟師と猟犬の関わりが見過ごされてきたことが指摘できる。

また、本稿が両者の関係を考察するうえで着目したいのが、人間と他生物種の交渉を扱い、なかでも人とイヌの関係を重点的に論じたダナ・ハラウェイの研究である[Haraway 2007; ハラウェイ 2013]。ハラウェイは、それらの相互交渉をコンタクト・ゾーンという枠組みを用いて理論化することを試みる。そこでは、コンタクト・ゾーンの特徴を、イヌと人間の絡み合いによる主体性の相互構築が生まれる一方で、複数種がともにあるためには、権力や階層性が深く関与するものと捉えている。本稿も先行研究と視点を同じくし、椎葉村の猟師と猟犬の交渉の場では、上記のコンタクト・ゾーンの特徴が認められることを論じるものである。しかし、本稿では、それらの特徴が、猟師とイヌの接触領域が山であるのか里であるのかによって大きく異なることを示す。上記の民俗学研究やハラウェイの研究は、共通して、イヌと人間の接触領域を一元的に捉えてきたことを指摘できる。本稿では、椎葉村の猟師と猟犬の相互交渉を、猟犬の飼育、狩猟の実際、猟犬の怪我と死、コウザキ信仰といったトピックから検討することを通して、従来の研究では見過ごされてきた里と山という異なる領域間を横断することによって猟犬が全く異なった存在となって立ち現れる諸相を考察する。

1 九州山間部の狩猟と猟犬

これまで、九州山間部の狩猟文化の研究において猟犬に着目したのは、民俗学者たちであった。その地域では、18世紀以降独自の狩猟伝承が形成されてきたことが知られ、民俗学が主にそれらを取り上げて考察してきたのである¹。椎葉村の猟犬に関する研究は、従って、狩猟伝承研究のなかで取り上げられてきた。これらの研究は、狩猟に適する犬種やそれらの特徴について [山口 2001]、猟犬を仕込む方法や、狩猟の際のイヌの役割と扱い方 [柳田 1989; 山口 2001; 永田 2016]、猟犬にまつわる信仰 [千葉 1990; 山口 2001; 野本 2004] に着目してきた。

上記の研究は共通して、狩猟の際には猟犬が最も重要視され、猟師にとって重要なパートナーとなることを強調する。これらの研究は、猟師が最適な犬種を選び、それらを掛け合わせて仔犬を作り、猟犬へと育てることを報告している [柳田 1989; 山口 2001; 永田 2016]。例えば山口保明は、宮崎県の猟師が、犬種により性質が異なるため、シシイヌ、キジイヌなどと使い分けるためにイヌを選別し、ときには隣県まで出かけ仔犬を求めることを記している [山口 2001: 92,186]。また、仔犬を仕込む手法も報告されており、生後3ヶ月頃から山に入れ、ハナイヌ（猟の経験の長い先導役）につけて実際に猟を経験させることで覚えさせるという [山口 2001: 92]。狩猟の際のイヌの役割に関しては、先行研究の多くが「猟の90%はイヌで決まる」等の現地の猟師の言葉に言及し [e.g. 山口 2001: 151]、その重要性を指摘するものの、実際の狩猟現場における猟犬の役割に着目した研究はほとんどない²。そのようななかで、永田りさは、熊本県五木村の事例から、個人猟や集団猟などの狩猟形態の違いによって猟犬の扱い方が異なる点や、猟師がいかにGPS等を用いてイヌと連携しあうかに着目し、猟中の猟師とイヌの関係を描き出したといえる [永田 2016: 42-53]。

猟犬にまつわる信仰に関しては、千葉 [1990]、山口 [2001]、野本 [2004] が、九州の日向山地一帯にみられるコウザキ信仰を取り上げ、事例報告を行っている。コウザキ信仰とは、猟犬が狩猟中にイノシシの牙の犠牲になって死んだ場合に、山中で棚を作り風葬することで猟犬を神として祀る習俗を指す [野本 2004: 351]。地域ごとに儀礼内容に多少の違いがみられ、現在椎葉村で行われているそれに関しては5章4節で詳細を取り上げたい。しかし、どの地域にも共通する点としては、儀礼を通じて、猟で犠牲になった猟犬の霊をコウザキ様という神に集約させたとき、豊猟をもたらすという伝承があることがあげられる。コウザキ信仰に関して、事例報告が中心を占める一方で、野本寛一 [2004] は考察を加えている。野本は、風葬されるイヌが、家で病死したイヌではなく、猟でイノシシの牙にやられたものに限定されることに着眼する [野本 2004: 353]。後にそのようなイヌ

1 「狩猟伝承」とは、18世紀に作成された狩猟由緒書に基づき、猟師が入山し、作法に則して狩猟や獲物の解体を行い、山の神などに祈りを捧げるという狩猟をめぐる文化が伝承されていることを指す [柳田 1989; 千葉 1969, 1990; 永松 2000, 2005a, 2005b]。

2 狩猟活動における猟犬の役割を対象とした研究は、海外の事例を扱ったものに、池谷 [1989]、Marvin [2005] などがあげられるが、国内のみならず海外の事例を扱った研究も限られている。

の霊が浄化されたときに豊猟に繋がることから、病死したものには、そうしたイノシシに関わる霊力がないとみられていたのではないかと結論づける。

以上の猟犬を対象とした民俗学研究は、九州山間部の狩猟における猟犬の重要性を指摘した点や、全国的には猟犬は土葬される傾向があるなかで、日向山地に継承される棚上げ風葬の詳細を明らかにした点において貢献をなしたといえる。その一方で、筆者は、これらの先行研究に内在する以下の問題点を指摘したい。

一つ目に、狩猟研究にとって猟犬は重要な主題であることがわかるが、従来の研究においては断片的な情報の蓄積に留まっており、それらも猟犬の伝承の聞き取りのみに基づいている点があげられる。二つ目に、狩猟という文脈に限定して猟犬の役割が論じられているため、日常生活における猟師と猟犬の関わりが見過ごされてきた点が指摘できる。前述したように、猟犬は、狩猟の際に重要な役割を担い、猟師にとって特別な存在となることが強調されてきた。しかし、その重要性や特異性は、日常において人々と猟犬がいかに関わっているのか、生活全体のなかに位置づけられてこそ明確になると思われる。とくにコウザキ信仰に関して、野本〔2004〕が指摘する、猟の犠牲になったイヌのみが風葬されるという点に着目すれば、里における生活と、狩猟の場において、人々と猟犬の関わりはいかに異なるのかを考察することが重要である。以上の問題関心に基づき、本稿の目的の一つは、日本の文脈においてこれまで十分に明らかにされてこなかった猟犬について詳細を報告することに加え、猟犬と猟師の関係を、「里の領域における生活の場」と「山の領域における狩猟の場」の異なる位相に着目して考察することにある。

074

2 人間とイヌの種＝横断的交渉

上の民俗学研究に加え、椎葉村の猟師と猟犬の関係を検討するうえで、本稿が着目したいのが、非人間と人間との種＝横断的交渉に焦点をあて、なかでもイヌと人間の間を中心にして主体性の相互構築のあり方を考察する研究である〔e.g. Haraway 2007; ハラウェイ 2013〕。とくにここでは、ハラウェイの研究を取り上げ、イヌと人間の相互交渉がコンタクト・ゾーンという枠組みから検討されている点に着目したい。

ハラウェイは『犬と人が出会うとき (When Species Meet)』のなかで、イヌと人間との種＝横断的交渉が生まれる場を、コンタクト・ゾーンという概念を用いて理論化している〔ハラウェイ 2013: 309-373〕。コンタクト・ゾーンという概念は、もともとメアリー・プラットが『帝国のまなざし (Imperial Eyes)』で定義したものである〔Pratt 1992〕。そのもとになっているのは、言語学で使用されていた「コンタクト・ランゲージ」というもので、異なる文化が出会う社会空間において、母語が異なる話者間で安定したコミュニケーションを図るために生み出された即座言語であるという〔ハラウェイ 2013: 327〕。ハラウェイは、植民地における遭遇が生み出す、相互作用的で即座的な言語に着目し、新たな対象物が互いの関係のなかで構成されている点を重要視する。また、プラットの定義である「コンタクト・ゾーンは、しばしば支配と従属という極端な非対称的関係において生じる」〔Pratt 1992: 4〕という点も取り入れている。プラットの定義をベースに、ハラウェイ

はさらにそれを発展させる形で、その概念に、自然文化的な多数種という要素を付け加える。その際にハラウェイが参照するのは、人間と人間ではない生き物がともに暮らす場を民族誌の中心にした人類学的研究である [e.g. Tsing 2004; Sundberg 2006; Kohn 2007]。

例えば、アナ・ツインは『フリクション (*Friction*)』(2004) のなかで、インドネシアにおいて、焼畑農業によって形成された二次林が、合法や非合法の伐採を経て、工業規模の単一作物の栽培へと向かい、人々の土地や暮らしが変容を強いられるなか、住人が絶滅の危機に瀕した生物を収集し命名する場を考察する [ハラウェイ 2013: 330 参照]。ハラウェイは、ツインが、現地で起きた保全運動に関わった住人と生き物との関係を対象とし、植物や微生物などの生物と人間との種間の相互依存が起こるなかで、歴史的に変遷してきた人々のあり方を描いている点に着目する。そして、複数種の絡み合いによって主体性の相互構築が生まれる場としての側面を、従来のコンタクト・ゾーンの概念に付け加える。ここでは明確にその概念が定義されているわけではないが、彼女のイヌと人間の相互交渉を考察するあり方からは、その特徴を、①種＝横断的交渉を通じた主体性の相互構築が生まれる場であり、②しかし、そのような場で複数種がともにあるためには、身体規律等を含む権力性が深く関与し階層性がみられる、と捉えていることが明らかになる。以下では、上記のような特徴をもつその概念がいかに用いられているのかを、先行研究の事例を通してみていきたい。

2-1 コンタクト・ゾーンにおけるイヌと人のトレーニング

ハラウェイは、複数種がともに暮らす場としてのコンタクト・ゾーンにおいては、人間は例外的存在としてあるのではなく、人間もまた交換的複雑性の層構造にあり、互いに相手を形成しあう多くの種（地形、動物、植物、微生物、技術など）の結び目に位置していると論じる。応答も、敬意も、こうした結び目に位置することで、そして異なる状況や歴史におかれたそれらの種が互いを振り返ることで、はじめて可能となると論じる [ハラウェイ 2013: 67]³。また、パートナーは、それが関連づけられる対象に先んじて存在しているのではなく、あらゆる種は、一緒になり、「主体と対象をかたちづくる出会いのダンス」の結果生じて存在しているにすぎず、それこそが伴侶種のあり方だと主張する [ハラウェイ 2013: 30]。従って、伴侶種として互いを構成しあい、互いの生身を形づくるものであることがわかる。ここで重要なのは、ハラウェイがジャック・デリダを批判しながら主張するように、抽象的なレベルに留まるのではなく、実際の動物と人間の関わり合いに

3 応答と敬意に関するより詳しい議論は以下のとおりである。ハラウェイは、伴侶種 (companion species) の語源に着目し、伴侶 (companion) という語彙は、ラテン語のクム・パニス (cum panis) 「パンをともにする」からきており、種 (species) は、ラテン語の specere という語が基本にあり、視覚に関わると論じる [ハラウェイ 2013: 31]。そして、見ること (respecere)、つまり敬意を払う (respect) という行為に着目し、尊敬する、応答する、何度も振り返る、注意するといったことは、すべて、礼儀正しい挨拶、種と種が出会うときと場所に結びついているという。出会いに際して、つまり尊敬や敬意を払うにあたって、伴侶と種を結びつけることは、一緒になる (becoming with) という世界に足を踏み入れることであるという。アナ・ツインの「人間の本性は、種間の関係性にある」という主張をひきながら、ハラウェイは、種の相互依存は、地上において世界を生きるゲームの名称であり、このゲームは、応答か敬意かのいずれかである必要があると論じる [ハラウェイ 2013: 33]。

着眼するということである⁴。

イヌと人間の関係に関しては、ハラウェイ自身と彼女の牧羊犬カイエンヌがペアで行うアジリティーのトレーニングの事例を通じて、彼女たちが経験した物質的、記号論的交換を考察している。アジリティーとは、競技スポーツであり、20個ほどの障害物（バージャンプ、A フレームなど）が設置されたコースを、イヌとその飼い主であるハンドラーが共同で走る。人々は、コースを把握し正確に走る計画を立て、イヌは障害物を通過していくが、人々は的確な指示をタイミングよくイヌに伝えなくてはならない。

ハラウェイによると、イヌという他生物種とともにトレーニングを行うことは、コンタクト・ゾーンという「権力、知識や技術、道徳の問題に満ちた」サイトでの出会いであり、種＝横断的に共同で、それらを通じて主体が形成されるような出会いであるという [ハラウェイ 2013: 310]。すなわち、コンタクト・ゾーンにおいて、イヌと人間の相互交渉による新たな主体や、「二からある種の一を作るために、形態を作り変える」[ハラウェイ 2013: 331] ことが生まれる一方で、それはまた、権力性や力の不釣り合いな関係を内包していることを意味する⁵。ここでは、アジリティートレーニングが孕む権力性のなかでも、本稿の後の議論において重要と思われる身体規律の問題を取り上げたい。アジリティーは、自然に発生したものではなく、人間が作り出したスポーツである。スポーツにはルールがあり、熟練を要し、比較による評価が下される。イヌと人間は従わなくてはならない基準に縛られるが、それらは人間によって設定されたものである。また、パフォーマンスでよい評価を得るためには、人間はイヌを訓練する必要がある。スキルを習得させるためにイヌを訓練することは、身体規律を伴い、動物が人間のために従属させられるという側面も否定できない。

以上のように、先行研究は、コンタクト・ゾーンは力の不釣り合いな関係を内包することを強調する。しかし、前述したように、トレーニングは、イヌと人間が相互交渉的に新たな主体を作り出す場でもある。トレーニングは、上記のような規律、計算や方法といった側面のみで成り立っているのではなく、「プレー」という側面を併せ持つという。プレーは、ルールに規定されるものではなく、意図（狙い、目的）がない。すなわち、トレーニングのルールを破るのがプレーとして位置づけられている。ハラウェイは、プレーを行ううえで必須となる異種間のコミュニケーションの方法として、身振りなどを用いたメタコミュニケーションなど、言語や心、時間に関して論じ、プレーが、ハラウェイとカ

4 ハラウェイのデリダに対する批判の詳細は以下の通りである。デリダは、ある日、浴室でネコが裸姿であった自分を凝視していることに気づき羞恥心を覚えたという。しかし、ハラウェイは、その際のデリダの反応に対して、どうやってネコが振り返ったのか、その時に実際にネコが何を考え、感じていたのかといったことに関心を払っていなかったと批判する。すなわち、デリダは実際のネコとの関わりにおいて、ネコに関心を払うという、伴侶種をめぐる重要な義務を怠ったと批判している。

5 コンタクト・ゾーンにおける複数種の接触は、また、前述したように、歴史的状況におかれた人間と動物の出会いである点も重要である。例えば、アジリティーというスポーツに、ハラウェイとカイエンヌはカリフォルニアという地で共同で取り組んでいるが、ハラウェイは、ゴールドラッシュで一旗あげようとした地に入った白人入植者の子孫にあたり、カイエンヌは、その入植者の食糧としてオーストラリアから輸入したヒツジの群れをこの地で率いていた牧羊犬の子孫にあたる。このように、コンタクト・ゾーンで接触するそれぞれが自然、文化、歴史的な層をもつことがわかる。

イエヌを、「互いに意味ある他者とする」と論じる [ハラウェイ 2013: 358]。プレーに関する理論的議論は、イヌと人間の相互交渉的な主体構築にとって重要ではあるが、ここでは、本稿の後の議論でより重要になる彼女たちの実際のトレーニングの事例に着目したい。

ハラウェイは、トレーニングのなかでも障害物に直面するときに、人間とイヌの交渉による主体の作り変えが起こるコンタクト・ゾーンであると主張する。アジリティーを行う者は、多くの場合、パートナーのイヌを信頼することができず、イヌのパフォーマンスを管理しすぎるために失敗するという。実際、ハラウェイも、カイエヌを信頼しているときは、どんな障害物があっても止めることはないが、一度、難しいポールがある場所をイヌがスピードを出したまま通り抜けようとしたときに、イヌの前に突進して走路を阻んだことがあったという。そこでカイエヌは、それまで快調にターンしながら走っていたスピードを少し落とし、彼女からすばやく身をかまし、みごとゴールを決めたという [ハラウェイ 2013: 339]。この事例からは、ペア競技を成功させるためには、障害物に直面した際に、イヌは人間の指示に従うのみではなく、人間が不安げな管理をしているかどうかをイヌ自身が判断することや、イヌが出す合図や行動を人間が読み取り、それに応答することが重要であることがわかる。実際、ハラウェイは、競技者である人間たちは、イヌを意のままにコントロールしているのではなく、異種間チームの一構成員としてのみあり、異種間のトレーニングを通じて、人間は、イヌが考え、感じていることに近づき相互に意味のあるコミュニケーションを行うと論じる [ハラウェイ 2013: 342]。たとえ不完全であっても、意思疎通を試みて理解しあうことを抜きにしては、それぞれが責任をもち、それに対して応答するという絡み合いが起こることはない。コンタクト・ゾーンにおいて、種と種は、階層性を内包しつつも相互に互いを形成しあうことがわかる。

以上、ハラウェイが提示するコンタクト・ゾーンの概念を事例とともに確認してきた。本稿も先行研究と視点を同じくし、椎葉村における猟師と猟犬の接触領域には、上記の特徴が認められることを論じるものである。しかし、本稿は、そのコンタクト・ゾーンの特徴が、椎葉村においては、両者の交渉が山であるのか里であるのかによって大きく異なることを示すことで、先行研究に新たな視座を加えることを目的とする。

計 11 ヶ月の調査からは、猟師と猟犬の相互関係は、里と山で全く異なったものであり、例えば、里では、猟師は猟犬の品種改良に専心し、しつけや世話などに力を入れず、さらに狩猟に使えなくなった猟犬の多くは保健所で処分されることが明らかになった。里における両者の関係は、権力を伴う階層的要素が強く反映されていることがわかる。しかし、山においては、狩猟の際の獲物の探索や捕獲では、猟犬は猟師の指示に従わなくてはならない側面がみられながらも、猟犬が猟で最も重要な働きをなし、個性をもった個であり主体となることが明らかになった。また、同じ猟犬の死であっても、狩猟中に怪我をして死んだ場合にのみ、コウザキ様という神へと神格化されることが明らかになった。このように、各領域において相互関係に違いがみられ、猟犬は全く異なる存在となることがわかる。ハラウェイが指摘するコンタクト・ゾーンの特徴は、椎葉村の文脈では、山での狩猟における両者の交渉に限られるといえる。従って、先行研究が一元的で固定的にコンタ

クト・ゾーンを捉える一方で、本稿は、より複層的にそれを検討しなおすことを通じて、同じ人間とイヌの関係であっても空間的位相の違いによって、その特徴が全く異なるさまを民族誌的に描き出す。そのことは、ハラウェイの概念を重層化する視点を切り開き、より動的な種間関係を明らかにすることにつながると思われる。また、結論部ではさらに考察を進め、ハラウェイがアジリティートレーニングという特定の文脈に焦点をあて人間とイヌの主体性の構築のあり方を理論化する一方で、本稿で着目する狩猟という文脈におけるそれとのあいだにはどのような差異があるのか、その点を検討することを通じて、狩猟時に発揮されるイヌの「主体性」が何を示すのかを明確化する。以下では、猟師と猟犬の身体的交渉に着眼し、狩猟の実際、猟犬の怪我と死、コウザキ信仰といったトピックの考察を進めていきたい。

3 調査地概要——椎葉村の猟犬を用いた狩猟

ここでは、本稿の舞台となる宮崎県椎葉村の概況と、今日の椎葉村における猟犬を用いた狩猟活動の位置づけを確認したい。

宮崎県椎葉村は、県の北西部に位置し、総面積は536.20²であり、その約96%が山林を占める〔椎葉村編 1994: 4〕。年間降水量は約2900mmで、水の豊富な地域であることに加え、山の南東に向かって広がる斜面と、深いV字溪谷などの諸条件が合わさり、生息する動植物はきわめて多様であることが報告されている⁶。椎葉村には10地区91集落があり、平成28年の人口は2739人である〔椎葉村編 2012; 椎葉村 HP 2016〕。生業に関しては、田畑の耕作、林業、原木椎茸栽培、蜂蜜採集、狩猟などの山の環境に適した生業を、世帯を中心に行いながら、現金収入を得る仕事に就くという複合的生業が営まれている。

現在の椎葉村における狩猟に関しては、猟期（11月15日～3月15日）に行われる狩猟と、年中行われる有害駆除の2種類がある。猟期の狩猟は、狩猟免許（罟・銃）をもつ猟友会の会員が、楽しみなどを目的にイノシシやシカを対象とした狩猟を行う。平成25年の椎葉村猟友会員の人数は108人である。また、椎葉村の狩猟には2種類の猟法（集団猟と個人猟）が存在する。集団猟の場合には、勢子（猟犬を連れて山に入り、獲物を見つけて追う役目）とマブシ（猟犬が追い立てる獲物を待ち構えて鉄砲で撃つ役目）に分担される。単独猟の場合には、両方の役を猟師一人が行う。この集団猟の方法は、柳田の『後狩詞記』にある「狩りの作法」にも記されている。そこに報告された複雑な儀礼は今日では簡略化されることが多いが、猪狩りの習慣は受け継がれていることがわかる〔柳田 1989〕。このように、今日みられる猟犬を用いた猟法は、椎葉村で継承されてきた狩猟伝承に基づくものであることがわかる。

また、もう一つの狩猟のあり方として、ここ15年ほどで深刻化している獣害の対策として年中行われる有害駆除があげられる。今日の猟師の狩猟活動の大半は、有害駆除の任務にあてられている。被害を受けた椎葉村の住人が、役場に駆除願いを申請した場合、役

6 高等植物1300種、昆虫類1030種、鳥類69種、哺乳類15種が確認されている〔椎葉村編 1994: 7-26〕。

場がその地区の駆除班へ有害駆除を依頼する⁷。有害駆除の方法は、駆除狩りと罠猟（箱罠・くくり罠）があるが、駆除狩りに関しては、猟期の集団猟と全く同じ猟法がとられ、勢子とマブシに分かれて狩りが行われ、猟犬が重要な役割を担う。そのために、猟の技法や、猟犬の扱い方などを次世代に継承することが、獣害対策を行ううえでも重要課題となっているが、狩猟の継承者が少ないことが問題となっている。

若い世代が狩猟を積極的に行わない理由には、現金収入を得る仕事に就きながら猟を行う時間をとることが難しいという点や、狩猟免許や銃などにかかる経済的負担があげられる。とくに勢子は、猟犬を飼育する必要があるため負担を伴うとされ、人数が減っている。ひとりの勢子が、5～10匹ほどの猟犬を飼育するため、飼育場所の問題や経済的な負担が大きいことに加え、狩猟の際にもイヌを獲物がある場所に導く必要があり、他の猟師よりも山の地形に詳しくなくてはならないため、すすんで勢子になりたがる猟師は少ないといわれる⁸。現在、勢子の半数が65歳以上であり高齢化の問題が深刻であるが、椎葉村において猟犬を用いた猟法や信仰は、勢子を中心に継承されてきたのであり、今日においてもそれらは彼らによって実践されている。椎葉村は18世紀以降、狩猟伝承が伝えられてきたことで知られるが、近年、過疎・高齢化や獣害の深刻化など様々な社会変容を経験し、動物と人間の種間関係も歴史的状況が大きく影響したものであることがわかる。

4 里の領域における猟犬の飼育

今日の椎葉村では、猟犬の飼育は勢子の世帯を中心に行われている。猟犬は犬主に従う習性があり、イヌを誘導し獲物を探して追う役割の勢子が、猟犬を飼育して山に連れて行く必要があるためである。勢子を担当する猟師は、40名ほどおり、一人がおよそ5～10匹の猟犬を飼っている。前述したような猟犬の飼育がもたらす負担から、積極的に勢子を務めたがらない状況がある一方で、現在、勢子役の猟師に話を聞いたところ、「イヌがないと猟ができない。イヌが大事なので、年間何十万円もかけて養う」という意見が多く聞かれた。ここでは、猟師が集落において、いかに猟犬を飼育するのかをみていきたい。

猟師が猟犬を飼育する際に重視するのは、どのような性質のイヌを求めているのかによって種類や個体を選別することである。イヌの種類に関しては、シカ狩りに向くのは、長時間シカを追うことができるといわれるビーグル犬が好まれる。一方で、イノシシ狩りに向くのは、獲物の追跡に加え、猟中に気が荒くなりやすいイノシシに向かって噛みつく勇敢さをもつ、ビーグルと椎葉犬や日向地犬などの雑種が好まれる。新しい仔犬を入手する方法は、多くの場合が、他の猟師のイヌに仔犬ができたことを知ると、それらを譲ってもらったり、購入したりする。このような猟師同士のやりとりは、椎葉村内のみならず他

7 椎葉村には8つの有害駆除班があり、仲塔班、小崎班、上椎葉班、不土野班、松尾班、大河内班、尾向班、桑の木原班となっている。

8 猟犬を飼育するための経済的負担は、犬につける発信器代、エサ代（ドッグフードを購入すれば1袋1キロあたり（1500円）、狂犬病等の予防注射（一匹6000円）に加え、病気や怪我をした際には医療費がかかる。

県まで広がりを見せる。また、猟犬が仔犬を産んだ場合は、鳴き方や走り具合を確認し性能のよいイヌのみを選別し、残りは処分される。

また、今日ではどの猟師もイヌの品種改良を行い、よい猟犬を作るために工夫する⁹。一世代前の猟師（80歳以上）が現役の頃までは、品種改良も行わず、イヌの性能もよくなかったことに加え、経済的な理由から一人の猟師が飼育するのも2~3匹ほどであったため、年に3頭ほどの獲物しか捕れなかったという。品種改良は、昔と比較できないほどの猟犬の性能の改善をもたらしたという。遺伝で仔犬は親犬の性質を引き継ぐといわれ、他の猟師のイヌに自分の求める性質をもつものがあることを知ると、それと自分の飼育するイヌを掛け合わせて仔犬を作る。現在は一人の猟師が飼うイヌの数も増え、それぞれの能力や特徴をもった猟犬を集めて狩りをすると猟師は語る。

次に、日常において猟師がいかに猟犬を世話するのかに着目したい。上椎葉地区に居住する猟師Aさん（60代）は、20歳の頃から当時勤務していた上椎葉郵便局の局員たちとウサギ猟を始めた。以降、40年以上勢子を務め、現在は12匹の猟犬を飼育している。それらは、もともと飼育していたイヌや、夜狩内地区の猟師SIさん（豆腐屋40代）から譲り受けた仔犬3匹などが含まれる。

Aさんが居住する上椎葉地区は、役場などが並ぶ車道沿いに住宅が並び、イヌを飼うことは許されていないため、仲塔地区にあるAさんの実家の犬小屋で飼育している。その場所は、上椎葉から車で30分ほどの所にあり、実家には現在は誰も住んでいないことから、Aさんは、2~3日に1回そこへ通いイヌの世話を行う。犬小屋は、網フェンスでできており、1匹ずつそれらで囲われている。世話に関しては、餌やりと犬小屋の掃除を主に行い、基本的には犬小屋で「放っている状態」だという。イヌをペットとして飼う際に通常行われるような、散歩や、洗ったり、家に入れたりすることは猟犬に対しては行わない。エサは、水と米を炊いたものを与えていたが、夏はすぐに腐るためドッグフードを購入して与える。12匹いるので、ドッグフード1袋が1日でなくなるという。また、猟犬は、頻繁に猟に行き（猟期は1週間に1回、夏でも1ヶ月に2回ほど）、山を走るため汚れているのが常であり、それらを度々石鹸などを用いて洗い落とすことはない。

Aさんは、狩猟に行く前にトラックにイヌを積んでから現場に向かうが、猟以外では犬小屋につないでいるため、イヌはほとんどの時間を小屋で過ごす。その理由には、10年ほど前より人に被害を与えないように猟犬の放し飼いが禁じられたことや、普段はイヌをつないでおくことで、猟で山に入るときには、イヌは喜び力を発揮するためであるとAさんは語る。実際、猟の前にAさんが軽トラックで迎えに行くと、イヌはそれがわかるため喜んでしゃぎ、1匹がトラックに乗り込むと次々と勢いよく後に続いた。また、Aさんは、狩猟中に獲物を追わなくなったイヌは、保健所で処分するという。従って、現在飼育中の12匹はすべて現役の猟犬である。

猟犬の世話やしつけに関して、自宅で家族とともに飼われている猟犬についても確認し

⁹ 獲物を見つけたときに鳴く、獲物を追って走る、獲物に噛みつくなどの性質をもったイヌがよいとされる。

たい。夜狩内地区の猟師 SI さん（豆腐屋 40 代）は、I 夫人とともに自宅の前の犬小屋でテリアとブルドッグの雑種の親子 4 匹を飼育する。イヌの餌やりは 1 日 1 回家族で行うが、先の猟師 A さん同様、とくに世話をを行うことはなく、普段は、木製の犬小屋につないだままの状態であるという。人間が厳しくしつけなくてもイヌの親子を一緒に育てると、親犬が自然と子に教えるという。親犬であるシロは、エサを食べきれない場合には土に埋める習性があるが、その仔犬のクロも自然と残飯を埋めるようになったという。猟に関しても、山に入ると自然と親犬の行うことを仔犬が見て学ぶために、猟犬へと育てるための訓練等もとくに行うことはないという。訓練に関しては、松尾地区の猟師 S さん（60 代）も、特別な練習をさせるわけではなく、仔犬を親犬とともに猟に連れて行き、イノシシの肉や血を与えると味を覚え、1 年ほどで自然と獲物を追うようになると話す。

以上、集落における猟犬の飼育のあり方から、猟師と猟犬の関係をみてきた。多くの場合、1 日 1 回の餌は与えられるものの、人々の家庭の場で猟犬が飼育される場合においても、猟犬のしつけや世話はほとんど行われなことが明らかになった。狩猟に行く以外のほとんどは、猟犬は小屋につながれた状態であり、人々は日常において特別にイヌに関心をもつこともなく、ともに時間を過ごすこともない。猟師は、餌やりや犬小屋の掃除などを行う際にも、短時間で作業を終わらせ、個々のイヌの健康状態などの確認は行っても、イヌに声をかける、名前を呼ぶ、遊ぶなど長時間をともにするような場面を確認することはできなかった。また、上記 2 名に加え、狩猟歴が 30 年以上の猟師は、これまでに 100 匹を超える猟犬を飼育してきた人が多く、イヌが病気や怪我などを理由に狩猟を行えない状況になった場合には、飼育の負担を軽減させるために保健所で処分することが多い。

以上のような里における猟師と猟犬の交渉に着目すると、多くの場合、猟師は猟犬を個々の名前や個性をもつイヌとして捉えていないことが明らかになる。先に、ハラウェイがアジリティというイヌと人のコンタクト・ゾーンにおいては、異種間トレーニングを行うなかで、双方が互いの考えに近づき、意思疎通を行うことによって、相互に主体性を構築すると論じたことを確認した。しかし、これまでみてきた事例からは、里とは日常生活を営む場であるにもかかわらず、猟師と猟犬の接触や交渉自体が起こりにくいことがわかる。そのような点において、ここではハラウェイが指摘するイヌが能動的な主体となるような側面は確認できず、猟師とイヌがともに主体性を作り変えることも起こりにくいことが明らかになる。

また、身体規律のあり方に着目すると、里の生活においては、猟犬への特別な訓練やしつけはみられない一方で、猟師が飼育する猟犬を選択する段階で、イヌの種や性能を確認し、品種改良を通じて、猟師の求める働きをなすイヌの個体のみを取捨選択していることがわかる。人為的な操作に基づき、人間にとってより有用なイヌの個体を作り出すという点や、猟犬としてふさわしい素質をもつと判断されたもののみが飼育下におかれ生存が許されるという点から、人間が、猟犬の身体的能力を評価する基準を設けイヌの生殖自体を管理するという意味においては、イヌの身体は完全な人間の管理下にあるといえる。また、猟ができなくなったイヌは保健所で処分されることから、猟犬を狩猟という目的のために役立つ道具的存在としてのみ捉えられている側面も否定できず、里におけるイヌ

と人間の関係には、権力を伴う階層的関係が顕著に反映されているといえる。

5 山の領域における猟師と猟犬

5-1 狩猟の実際——獲物の探索

第3章で確認したように、椎葉村における狩猟は勢子とマブシに分担して行われ、猟師のあいだでは勢子の役割が重要視される。その理由は、勢子は動物の居場所や山の地形を把握してイヌを導かなくてはならず、猟師のなかでも最も山や猟犬に詳しくなければ務まらないといわれるためである。また、猟師たちは、狩猟の成功は猟犬にかかっており、「イヌがいなければイノシシ1頭すらみつけることができない。人間が100人いても獲物を捕まえることはできない。(尾前地区Kさん40代)」といい、猟犬が狩猟の大半の仕事を担い、重要な働きをなすことを強調する。山での狩猟時の猟師と猟犬の関係は、里のそれとは全く異なることがわかる。ここでは、狩猟の実際に着目し、勢子と猟犬による獲物の探索と捕獲のあり方を考察したい。

狩猟の際にいかに猟犬が重要な役割をなすのか、その詳細を考察するうえで、まず着目しなければならないのは、勢子と猟犬によって行われる獲物の探索である。猟師たちは、人間の嗅覚の数倍といわれるイヌが獲物を見つけ出すことなしに猟は始まらないことを強調するが、山にイヌを放てばおのずと獲物を見つけ出すというものではないともいう。重要なのは、勢子がイヌを連れて山に入り、獲物を見つけ（椎葉村では獲物を見つけることを、寝ている獲物を「起こす」という）、追いだす必要があるという点である。そのた

め、獲物の探索では、勢子が「アトミ」という作業で獲物がいそうだと判断した場所へと猟犬を導く。ここでは、どのような場所に、いかなる点に注意をしながらイヌを導いているのかを明らかにするために、調査中に参与観察することができた「アトミ」の詳細をみていきたい [cf. 合原 2016]。

「アトミ」とは、狩りを行う前日に、猟師が山を注意深くみてまわり、獲物の居場所や通り道、いつ頃動物が現れたのかを確認し、翌日狩を行う際に、勢子はどこからイヌを入れるか、マブシはどの辺りで待機するかといった配置を決めるための作業のことを指す。以下では、2014年9月29日に、夜狩内地区の勢子Sさん（60代半ば）が、上椎葉の狩猟組のカクラ¹⁰である間柏原



写真1 獣道沿いに観察を行うSOさん

10 カクラとは、各狩猟組によって狩猟を行う山の領域が決まっており、そのようななわばりのことをいう。

地区の一本松と呼ばれる山で行った作業から、狩猟中の勢子と猟犬の動きを確認したい。なお、Sさんは、28歳のときに宮崎市から椎葉村に戻ってきて以来、30年以上上椎葉班に属して勢子を務め、現在は7匹の猟犬を連れて猟をする。

猟師Sさんによると、カクラのどの辺りに獲物が出てきそうかを推測するために最も重要なのは、獣道¹¹の観察だという（写真1 獣道沿いに観察を行うSOさん）。山中には多くの獣道が抜けており、動物は、普段より獣道以外はほとんど通らないため、それらを注意深く観察し、動物が現在でもよく使用しているものを見分けることが重要になる。動物が頻繁に行き来する獣道は、土が踏み固められ、下草は食べられて短くなっていたり、踏みつけられて枯れていたりするので見分けることができる。また、植物の枝などが折れている位置を確認することにより、シカとイノシシでは胴体の高さが違うため、どちらの動物が通ったのかを判断することが可能になる。シカの場合は、樹木や植物のある程度高い位置まで首を伸ばして食べた跡がみられ、イノシシの場合は、通った後の植物が踏みつけられていることが多いという。その他には、獣道に足跡がついていないか、それらが新鮮かどうか、また足跡の大きさや深さから動物のサイズや体重まで判断がつくという。以上のような獣道の観察から、いつ頃動物がきたのか、イノシシとシカのどちらが頻繁に現れたのかを判断する。

また、集落周辺には、耕作放棄地となりカヤが生い茂った田畑などに、落ち葉や枯草を敷きつめて作られた「シシの寝床」が散見される。普段からイノシシは雨風をしのいで寝るための場所として「寝床」を作り、また寒明け頃に身籠ったイノシシは、彼岸頃より巣を作るといわれる。その頃には、水はけのよい地点に穴が掘られ、そこに落ち葉や枯草が敷きつめられ、入り口にはさらに丈の長いカヤでふきとじられた巣がみられる〔田淵1993: 61〕。夜行性であるイノシシは昼にこのような場所で寝ている可能性が高いため、「アトミ」では、そのような場所を確認する。また、イノシシの風呂といわれる「ニタバ」や、山道にできた水たまりなどに最近イノシシがきていないかを、足跡、水の濁り具合や、泥にイノシシの毛が触れた跡がないかを確認して判断する。「ニタバ」とは、イノシシが山中の雨水がたまるような場所に大きな丸い穴を掘って水たまりを作り、ダニなどを落とすために風呂のようにして使用する場所を指す（写真2 イノシシの「ニタバ」）。また、「ニタづり」といってニタバで寝転がってダニを落とした後に、体につく泥を付近の木などになすりつける習性があるため、そのような跡がないかを確認する（写真3「ニタづりの跡」）。寝床や巣、「ニタバ」を作るのはイノシシのみにみられるといわれ、これらを使用した跡が新しいほどその付近に動物が潜んでいることになる。

以上の観察に加え、イノシシやシカが地面を掘って赤土が露出している場所なども確認する。これらの観察の結果、動物の出没状況に関して明らかになったことを猟師たちと話し合い、勢子はどの位置から猟犬を入れるか、またマブシはどの獣道で獲物を待ち受けるかを決定する。勢子は猟のときには、この「アトミ」で獲物が潜んでいそうだと思われた

11 山中にみられる大型の野生動物（イノシシ、シカ、タヌキなど）が日常的に使用している道のことを「獣道」と呼ぶ。山のなかには動物が移動するのに適した経路があり、それ以外の場所は通らないという。

場所を中心に猟犬を導き、獲物を探させる。また、勢子は獣道の位置を把握しているため、イヌが獲物をどの獣道沿いに追っていったのかを確認することで、どの辺りにたどり着くかを予測できるという。



写真2 イノシシの「ニタバ」



写真3 「ニタバりの跡」

084

以上のSOさんのアトミの作業からは、するどい嗅覚をもつ猟犬をなくしては狩猟中の獲物の探索は不可能であるが、山にイヌを放てばおのずと獲物を見つけ出すというわけではなく、勢子が狩猟中にイヌを導く必要があり、勢子は、獣道、シシの寝床、ニタバなどの具体的な場所や山の地形を把握していることが必要不可欠であることがわかる。

5-2 獲物との格闘と捕獲

先にみた過程を経て獲物の探索が行われた後、獲物を見つけ出した場合には、捕獲されることになる。捕獲における猟犬の働きを、ここでは、尾前班の勢子Mさん（森林組合30代）の狩猟に同行した際の事例に着目してみたい。

勢子Mさんが狩猟を始めたのは2年ほど前で、現在は尾向班に所属し、2015年2月に尾前地区で行われた有害駆除の際には、ロン（雄）、マロン（雌）、モス（雄）、ベン（雄）の4匹を連れて山に入った。今日の椎葉村では、狩猟時に猟犬の首に発信機をつける場合が多く、イヌが走っている場所や獲物を捕らえた場所を、猟師は把握することができる。しかし、Mさんは猟を始めて日が浅く、猟犬にもまだ発信機を取りつけていなかったため、山中のイヌの動きを比較的目的で見えて把握しやすい場所を担当することになった。

尾前地区の「日光斜」と呼ばれる山のエリアに入り、まずは、勢子Mさんとイヌが歩いて獲物の探索を行う。Mさんが、「イヌは匂いで獲物を見つけ出すが、獲物を探し求めて走りっぱなしになることはあまりない」と言うように、その間、4匹の猟犬は、Mさんから離れて獲物を探しに行っては、また勢子の所に戻ってくるということを繰り返して

いた。そして、1時間半ほど探索を続けた頃に、Mさんの5mほど前方を歩いていたロンが、獲物を見つけたような様子で突然スピードを上げて走り去った。他の3匹のイヌもその後を追ひ、鳴き声が聞こえたため、獲物を発見した様子であったが、Mさんが現場へと駆けつける途中で、ロンが獲物を見つけた場所からMさんの所へと再び戻ってきた。筆者が、どうしてそのまま獲物と格闘せずに戻ってきたのかと聞くと、以下のように語った。

ロンは最近はそのようなふうによく動く。これまでに何度か、ロンが遠くで獲物を起こしたときに、場所がわからずにすぐにその場に駆けつけることができないことがあった。木が邪魔してわからないことがある。そんなこともあってか、最近、ロンは、自分の首には発信機が取り付けられていないことを知っていて、獲物を起こした場所を伝えるために戻ってくるようになった。(2015年2月15日)

猟犬には、「ハナイヌ」と呼ばれる狩りの経験を積んだ先導役がおり、ロンは今年で7歳になるが、グループの先導役を務める。多くの場合、一番先に獲物を見つけて知らせ、他のイヌを引き連れてイノシシをマークするという。上の語りからは、ロンは他のイヌを獲物のいる場所へと引き連れて後、その場所をMさんに知らせるために再び戻ってきたことがわかる。

獲物を見つけた後の猟犬の働きは、獲物がイノシシとシカの場合で異なる。イノシシの場合は、ハナイヌが、他のイヌたちと4～5匹でイノシシの周囲を外側から囲み、獲物が動き回ることができないような場所に追い込んで戦うといわれる。椎葉村では、このように猟犬がイノシシを包囲して闘争することを「タテニワ」と呼び、イヌは、イノシシの急所である前足の脇下や耳の辺りを噛んで戦うという。マロン、モス、ベンは3～5歳で猟の経験が浅く、若くて好奇心も旺盛なためイノシシにも噛みついて闘争する傾向があるが、それらが短時間でイノシシと戦うことに体力を使い切ってしまうことが多い一方で、ロンは猟の経験を積んでいるため、Mさんがその場へ駆けつけるまでイノシシを捕まえて離さないことが多いという。

シカの場合は、イヌが獲物を囲い込んで格闘することもあるが、多くの場合は、イヌが逃げるシカを長時間追った後、獣道沿いを走りマブシが待つ場所へと送り込むことになるという。草食獣であるシカは、逃走することで外敵から身を守る習性があるため、走ることが得意だといわれる。イヌに追われたシカは1時間ほど山を走ると、必ず「焼けた足」を冷やすため川に浸かりにくるという。そのため、シカの場合には、マブシが獣道沿いに待機して仕留める猟法が適しているといわれる。そのようなシカ狩りの際に活躍するのはモスだという。椎葉村は、標高が1000mを超える62の山々に囲まれており、猟を行う際にも、猟師と猟犬はともに急峻な山の斜面を走ることができなければ狩猟を成功させることは難しい。とくにシカは、傾斜の厳しい山でも平気で長時間走り続け、2mほどのジャンプを繰り返して逃走するため、そのような足場の悪い山の斜面を長時間走ることのできる猟犬がシカ狩りには向くという。モスは、そのような狩りの際に力を発揮し、山道を5

時間ほど走り続けることができるため、これまでの猟でも、モスが追ってきたシカを仕留めることが多かったと Mさんは語る。

とくに獲物と格闘する場面では、猟犬は、勢子の様子を伺いながら、「止まれ」「離れろ」等の指示に従って猟を行うことが重要とされる。それらの指示は、猟師がそれらを声に出して合図することに加え、手で指示することが多いという。「止まれ」は、手のひらをイヌに向け、「離れろ」は、イヌを向かわせたい方向へと手で指示する。それらは、猟師がその格闘が安全かどうかを判断して行われ、また獲物を鉄砲で撃つ際に、猟犬に弾が当たることを防ごうえでも重要であるという。また、松尾地区の勢子 Sさん（65歳）は、「イヌがシシを追って岩場などに追い詰め、噛みついて格闘する。主人が何もせずに見ていれば最後までそうしているが、猟は獲物を1頭捕って終わりではないので、体力を使い切らないように「やめろ」という合図をするとイヌはピタッと戦いをやめる」と語る（2015年10月）。

以上、勢子と猟犬による獲物の探索と捕獲に関する事例をみてきた。猟中の猟犬の役割に着目すると、獲物の探索に関しては、アトミの事例で確認したように、勢子に導かれながらも、イヌが嗅覚で獲物を探し出さない限り、狩猟は始まらないことがわかる。そして、猟犬が、獲物を獣道沿いに追ってマブシの待つ方へと送るか、もしくは多くの場合がそうであるように、獲物に噛みついて直接仕留めるなど、猟における重要な働きは猟犬によってなされることが明らかになった。従って、猟師は、イヌが追う獲物を鉄砲で撃つ場合や、猟犬と獲物が格闘している場に駆けつけて撃つ場合があるが、どちらになっても、「猟師が鉄砲で獲物を撃つのは、それらを相手に闘っているイヌがやられてしまうのを防ぐために撃つ」（尾前地区 Kさん森林組合 40代）という言葉が示すように、猟師たちのあいだでは、最後のとどめとして鉄砲が位置づけられており、狩猟の中心は猟犬が占めていることがわかる。

また、猟中の勢子と猟犬との相互関係に着目すると、獲物の探索は、基本的に猟犬が勢子に導かれて行われること、そして獲物と格闘する際は、猟犬は勢子の命令に従わなくてはならない場面があることから、猟師がイヌの行動を管理している点において、狩猟の際にはイヌに対する身体規律が必要とされる側面があることが明らかになる。しかし、ハウエイがイヌと人間の交渉の場においては、権力関係のみならず、主体の相互形成が生じることを指摘したように、狩猟の成功には、人間によるイヌの管理のみならず、猟犬が主体性を発揮することが鍵をにぎる。また同時に、そうしたイヌとの関係性を通じて猟師の側の主体性も構築されるさまが明らかになる。

先にみた、勢子 Mさんのもとにロンが獲物の居場所を伝えに戻ってきた事例からは、イヌは猟師の命令に従うだけではないことがわかる。ロンは、するどい嗅覚でもって人間では見つけ出すことができない獲物を探し当て、ハナイヌとして他のイヌをイノシシがいる場所へと引き連れた後、発信器を使用していない Mさんの状況を判断して、Mさんが道に迷わないように獲物の居場所を知らせに戻っている。そこでは、イヌが自らその場の状況を判断して行動していることがわかり、イヌが Mさんの考えや感じていることを把握することによって、相互の意思疎通が可能となっていることがわかる。そのことによっ

て、Mさんは猟中に困難に直面した際に、ロンに助けられていることが明らかになる。また、人間にはない能力（するどい嗅覚など）をもった猟犬のみが得ることのできる獲物に関する情報を、Mさんに伝えていることもわかり、狩猟を成功させるためには、猟師はイヌが伝達する情報を読み取り、それらを頼りにしながら行動することが重要であることがわかる。

さらに、猟中に猟犬がどのような役割を担うのかを説明するMさんの語りに着目すると、ロンはハナイヌで、他を引き連れてイノシシをマークし、マロン、モス、ベンは若く猟の経験も浅いが体力がありイノシシには噛みつくなど、それぞれのイヌが個性や特性をもった個として認識されていることがわかる。自分のイヌの性格を把握して猟を行うという点に関しては、以下の事例からも明らかになる。Mさんの狩猟に同行中に、Mさんが離れた場所で鳴くイヌの声を聞いて、「モスのあの鳴き方は、ひょっとしたらシカを起こしたかもしれない」と筆者に言ったことがあった。このような発言からは、Mさんは、個々の猟犬の鳴き声や、そのイヌがどの状況でどのように鳴くのかを把握していることがわかる。

勢子が猟中に個々のイヌの性格を把握するのは、Mさんに限ったことではない。椎葉村では、狩猟後に猟師が集まり、飲み会が頻繁に開かれる。その際には、その日の猟で自分の猟犬がどのように獲物と戦ったかが語られることが多い。猟師は、「獲物を仕留めることよりも、自分のイヌがシシに対してどのような格闘をするか、それを見るのが一番の楽しみだ」（松尾地区勢子Hさん60代）と語る。狩猟中の格闘場面を携帯電話で録画していたものを見ながら、「イヌ数匹がシシの頭からかかっていき、頭やら耳やらにぶら下がっているところを、自分のイヌが即座にシシの背後に回り、背中を噛んだときには血が騒いだ」、「チビは怖がって、他が格闘する周りをうろうろするだけだ」などと語る。その様子からは、狩猟の文脈において、とくに獲物との格闘の場面において、個々のイヌの特徴や性格が把握され、猟師にとって個としての猟犬の存在が最も明確になるといえる。

以上の考察からは、狩猟の成功には、イヌが嗅覚等を用いてもたらず獲物の情報やイヌの状況判断が必要不可欠であり、山における猟師と猟犬の相互交渉において、猟犬は猟師のパートナーとなり、名前や性格をもった個となり主体性を発揮することが明らかになる。

また、狩猟時に、そのような猟犬との関係性を通じて猟師の主体性はいかに構築されるのかという点に着目すると、1点目には、先にみた猟犬の能動的な働きがあつてこそ、猟師は獲物を見つけ出し仕留めることができることから、主体となる猟犬との関わりにおいて、はじめて「猟師」としての主体性を獲得することが指摘できる。2点目に、先にみたとおり、狩猟時には、獲物の発見から捕獲までの大半の役割を猟犬が担うこと、また、猟師が狩猟を行う理由に、イヌの活躍をみるためであると述べることや、猟師が獲物を鉄砲で撃つ理由として、獲物を仕留めることが一番にあるのではなく、それらと格闘するイヌが負傷するのを防ぐために最後のとどめとして鉄砲を位置づけていることから、猟中の獲物との関わりを大半を猟犬に任せていることを指摘できる。獲物を発見した際にも、猟師はすぐにそれらを鉄砲で仕留めるのではなく、格闘するイヌが安全かどうかを確認し

ながら発砲を控える。獲物をとることではなく、イヌの活躍をみることが一番の目的とされる狩猟において、猟師は、獲物を撃つ衝動を抑え、獲物との関わりを制限しながら猟を行うなど、猟犬の主体性を最大限に引き出すために、猟師自身の身体を管理している側面もあることが明らかになる。従って、狩猟の場における猟師と猟犬の交渉では、イヌに対する身体規律に加え、猟師の身体もまた規律される側面を含みながら、相互が主体となり互いを形成しながら共同で獲物の捕獲を試みることがわかる。

5-3 猟中の猟犬の怪我と死

5章1節、2節では、狩猟の実際に着目し、猟犬の役割や、猟犬と猟師の相互関係を考察してきた。その結果、狩猟の際に猟犬は中心的な役割を担い、個性をもった猟師のパートナーとして主体となると同時に、猟師もまたそのような猟犬との関わりにおいて「猟師」としての主体性を獲得することを明らかにした。ここでは、さらに、間柏原地区 K さん（80代）の猟犬にまつわる語りにも焦点をあてることで、勢子にとって個々の猟犬は、ともに狩猟を行ってきたパートナーとして歴史を共有するものとして捉えられていることを指摘したい。とくに、Kさんが、自身のイヌが猟中に逃走や怪我をした経験を語るなかで、イヌがライフヒストリーをもつものとして立ち現れるさまを考察する。Kさんは、定年まではトラック運転手や林業の仕事を行い、2年前に猟中に足を怪我して猟をやめるまで、50年以上勢子を務めてきた。

088

事例1 逃走したタロウの探索

Kさんは、長年猟を行うなかで、猟犬が猟中に逃走したことが何十回とあったという。以下の語りは、7年前にタロウという猟犬が逃走したときのことである。

Kさん： どうしてもイヌは探してもわからんときがあるとよ。とうとう帰ってこん。一つはイヌが獲物を追うて行くでしょ。そうして猟師がわからん所まで追うていくんじゃわ。そうして、そこに行ったときに合戦するとよ。戦うなかに、シカじゃったら必ず水の中さに入っていくんよ。水の中に入ったら、もうイヌよりかシカの方が強いわ。ほいじゃから、シカは角をもってるから角で戦うわ。そのまま角で突かれて。それでイヌがつけてるマーカーは、水に入ったら駄目になってしまう。イヌは大きな傷を受けたら、そのまま水のなかで駄目になるとよ。

一度 Tさんと狩りに行ったとき、タロウがそういうことがあった。何度も逃走することはあったけど、とうとう帰ってこんと。1ヶ月ぐらい毎日探したけどわからん。イヌが行った方向はわかるとるわけよ。そんじゃから、イヌを探して五ヶ瀬のスキー場まで行った。その途中も、山の上を登って道が続いていないシライワまで入ってみた。それでも最終的には、イヌのマーカーの電池は1週間し

かもたん。日にちが経ちよると通じんようになる。獲物を追って行って、人が行かんような所まで行った谷で戦こうたんよね。そこでやられた。それが最終的にどうしてわかったかという、あくる年に川にエノハを釣りに行った人が、イヌのマーカ―だけ見つけてくれた。(2015年4月20日)

事例2 猟犬6匹の怪我

Kさんは、これまで猟中に猟犬が怪我をすることは数多くあったが、とくに記憶に残っている経験として、10年程前に小崎地区で狩猟を行った際の出来事を語ってくれた。

Kさん： 一度は小崎に行ったところが、俺のイヌが6匹、7匹持つとって、もう6匹が切られて。駆けつけたのも俺じゃったけど、行ったところがシシと戦いよって。そしたら結構切られて、そうしとってまやっぱり戦うとよね。これはもう、皆、イヌをしまおうと思ったもんじゃから離れとったけんども。かなり離れたところから、もうはよ（イノシシを）殺さんと、こらもうイヌを失うなと思うたから。イヌはどうかしたら必ず離れるんよ。イヌの方がぼつと離れるから、シシの方がひざったり、そのとき、狙つとってから、撃って。そうしてシシが倒れる。そのイヌもそこへ倒れたとよ。あれと思うて、獲物がえらいなものが獲れた言うけど、そんなもの必要ねえわちゅって。そこへ行ってみたらね、そのイヌの肝臓がそこにあばらのあいだに吹き出とった。

とにかく狩りに行くときは、5万は持っていつとった。必ずそれくらい持っておらんと、山からいきなり走らないかんことが多かったから。そうして行ったところがね、もうそんなときは、俺んのが6匹と、連れのが1匹やられとるもんじゃから、7匹連れてね。でも、本当はそう獲物に向かって傷を受けるようなイヌでないとだめなとよ。あんときは、どれもよう噛んだイヌよ。でも、そりゃなかなには利口なとおる。要領のいいとが。他にずっと噛まして相手が弱ってから、そうして自分が獲ったような恰好をするのがおるわけよ。

いやあ、そんなときはね、つれて出てこにゃあ、倒れたまましとるわけじゃから。そりゃあ雪もだいぶん深かったわね。「はよ、イヌをば連れてきてくれ」言うけど、よろよろすつとが多いわけじゃわ。どうにもならんから、猟師は首にゴミが入らんようにタオルをまいとるんよ。それで腹を、肝臓が噴き出とるから、それを押し込んで、もう泥とかゴミがついとるからそれに、そのままタオルで巻いてね。それから、もう道路に出とる獲物はもう見もせんとよ。イヌだけは、皆が駆け寄ったから、車に乗せてもろうて、そのまま病院に走った。(2014年3月1日)

以上、猟犬が狩猟中に逃走や負傷した経験にまつわる K さんの語りをみてきた。これらの事例からは、以下の 2 点が明らかになる。一つ目には、K さんは、50 年のあいだに遭遇した猟犬にまつわる事故の詳細を、個々のイヌの記憶とともに覚えており、鮮明に語っていることがわかる。二つ目に、里において病気や怪我をして猟ができなくなった猟犬は、飼育されず保健所で処分される一方で、猟中に怪我をした猟犬に対しては、猟師は全く異なる態度をとることがわかる。事例 1 では、タロウはよく猟中に逃走するイヌであったため、K さんはその度に探して連れ戻し、最終的に帰ってこなくなったときにも 1 ヶ月間毎日遠方まで探索を行ったことがわかる。事例 2 では、自身の 6 匹のイヌがイノシシとの闘争中に牙で切られた場面が鮮明に語られている。猟ではいつイヌが怪我をするかわからないので、いつ現場から病院へ直行することになってもしっかりとお金を準備し、イヌが傷を負った際には、獲物には気もとめず、とにかくイヌを助けることに集中している様子が明らかになる。K さんは、「自分の息子にもそんなことはしたことがない」と笑いながら、これまで何度も山で負傷したイヌを連れて夜中に病院に走ったと話す。同じ怪我した猟犬でも、なぜ猟師は里では処分する一方で、猟中の猟犬は全力で救い出そうとするのだろうか？ここではその点を考察してみたい。

5 章 2 節では、狩猟を成功させるためには、猟師がイヌの行動を管理するのみでなく、イヌが主体となって行動することが必要不可欠であることを指摘した。それは、ロンが、勢子 M さんが困っている状況を察知して、獲物の居場所を教えに戻る事例からも明らかである。その点に着目すると、ハラウェイが、アジリティーを行う競技者とイヌは、ともに異種間チームの構成員であると述べるように、狩猟においても、猟犬が主体性を帯びることで猟師のパートナーとなり、異種間チームとして共同で獲物の捕獲を試みているといえる。狩猟を成功させるために、猟師とイヌが相互に相手の考えることや感じていることに近づき、意味のあるコミュニケーションが生み出されるといえる。それは、山の領域における狩猟において生起する、特有の猟師と猟犬の相互交渉である。従って、猟犬が猟中に逃走したり負傷したりするなどの事故に遭うということは、その相互に意味のあるコミュニケーションが途中で途切れてしまうことを意味し、猟師にとってはパートナーを喪失する経験として記憶されると捉えることが可能である。上の K さんの語りからは、これまで異種間チームとして共同で行ってきた狩猟の経験が歴史となって、パートナーとしての個々のイヌの思い出とともに語られていることがわかる。里における猟犬の怪我と、猟中におけるそれが猟師にとって全く異なる理由は、そのような点にあると思われる。

5-4 神へと昇華する猟犬

5 章 3 節では、狩猟中の猟犬の逃走や怪我について考察した。ここでは、猟中における猟犬の死について取り上げたい。椎葉村では、狩猟中に猟犬がイノシシの牙の犠牲になるなどで死んだ場合、コウザキ様という神として祀られる慣習がある。前述したように、コウザキ信仰は、九州の日向山地一帯にみられ、民俗学を中心に事例が報告されてきた [千葉 1990; 山口 2001; 野本 2004]。ここでは、今日の椎葉村において実践されるコウザキ信仰の詳細を確認するとともに、そこにみられる猟師と猟犬の相互関係を考察したい。

椎葉村のコウザキ信仰は、地区ごとに儀礼内容に多少の異なりがみられる。例えば、コウザキ様のご神体が、石や樹木、白骨化したイヌの頭蓋骨などと異なる点や、それを祀る単位が、猟師個人か、複数の猟師の共同かという点が異なる。また、猟で獲物を捕獲した際にコウザキ様にお礼として祀る品が、イノシシの心臓の7キレか、または「ケバナ（毛花）」と呼ばれる、シカの尻の白い毛や、イノシシの首毛を、ウツギという枝に挟んだ供え物かによって違いがみられる。

向山地区に居住する猟師 KA さん（牛の飼育、60代）の場合は、自宅の裏山にコウザキ様と山の神を個人で祀っている。KA さんは、コウザキ様とは、猟中に怪我で死んだ猟犬を神として祀ったものであり、イヌが死んだ場合には、山中の現場で木の枝を集めて棚を作り、そこにイヌを上げて風葬すると説明する。棚の高さは1mほどで、その上にイヌを寝かせるときには、谷に下りて形のよい枕石を選びイヌの頭にのせる。そうすることでイヌの魂を枕石に移す。その石を家に持ち帰り、自家のコウザキ様に祀るという。風葬された猟犬は、2年ほどで姿がわからなくなるという。自家のコウザキ様には、御幣を祀り、猟でイノシシが獲れるたびに肉や心臓の七キレを串にさして供え、猟の無事や成功を感謝するという。先行研究では、コウザキ儀礼が豊猟に繋がることを強調しているが [千葉 1990; 山口 2001; 野本 2004]、椎葉村では豊猟よりも感謝の意味合いが強いといわれる。また、コウザキ様を祀るのは猟師のみで、女性や猟を行わない人々は関与することはない。

KA さん宅の裏山には、石が数個コウザキ様として祀られており、彼はそれらを指しながら説明を加えた（写真4 KAさん宅の裏山に祀られるコウザキ様）。そのうちの二つは彼が猟中に葬ったイヌであり、一つは、KA さんの祖父にあたる勢子 I さんがイノシシとの格闘中に自分のイヌを撃ったときのものであるという。そのイヌはヤマといい、好奇心が旺盛で、イノシシにでも平気で向かっていくようなイヌで、I さんも成長を楽しみにしていたという。猟中に間違えてヤマを撃ったのをきっかけに、I さんは狩猟をやめたと話す。その他の石に関しては、どのイヌがどのように死んだのかは確かではなく、子供の頃から裏山に祀られていたため現在もコウザキ様として祀っていると話す。

以上の事例からは、狩猟の犠牲になって猟犬が命を落とした場合には、棚上げ風葬の儀礼を通じて、猟犬の霊が石へと集約され、個々の猟犬は、自宅の裏山に石となって一つずつ集められていくことがわかる。5章3節では、間柏原地区 K さん（80代）の事例から、狩猟中に猟犬を事故等で失った場合には、勢子は、異種間チームとして共同で狩猟を行ってきたパートナーを喪失した経験として、そのイヌの思い出とともにそれらを語ることを確認した。そこからは、猟師は、ある特定のイヌとともに猟を行った具体的な記憶や、個々のイヌのライフヒストリーを把握していることが明らかになった。しかし、KA さんのコウザキ儀礼の事例に着目すると、KA さんが、自宅の裏山に祀られるコウザキ様の石をみて、具体的な個としてのイヌの記憶を思い起こすことができるのは、KA さんが実際に置いた石と、祖父 I さんが置いた石に限られることがわかる。すなわち、石として祀られるコウザキ様のもとの姿を、具体的なイヌとして把握できるのは、石を置いた本人か1、2世代前に限られ、世代を遡るほどにイヌのあり様を辿ることができなくなる。その

ことから、狩猟中は主体性を発揮し猟師のパートナーであった個としての猟犬が、コウザキ儀礼を通じて神へと昇華し、名をもつイヌは徐々に忘れられ、神として猟師の記憶に留まっていくといえる。特定の人と結びついた個としてのイヌは、その個性を儀礼的なプロセスを経て喪失することで、猟の際には猟師を守り、共同体を支える超越的な存在としての位置を獲得する。



写真4 KAさん宅の裏山に祀られるコウザキ様

6 結論——猟犬の「変身」

本稿の目的は、椎葉村の猟師と猟犬との交渉のあり方を、日常の場である里と、狩猟が実践される山の異なる位相から考察することを通じて、各領域に特徴づけられる種＝横断的主体性の構築のあり方を検討することにあった。その際に、人間とイヌの相互交渉をコンタクト・ゾーンという枠組みから捉えるハラウェイ [Haraway 2007; ハラウェイ 2013] の視座に照らし合わせて事例考察を行った。前述したように、先行研究では、コンタクト・ゾーンを、イヌと人間の交渉による主体性の相互構築が生まれる場でありながらも、身体規律を伴う権力性が深く関与する場として捉える。本稿における考察からは、椎葉村のイヌと人間の関わりにおいても上記のような特徴がみられることが明らかになった。しかし、両者の接触領域が里であるのか山であるのかによって、主体性の構築のあり方が異なることが明らかになり、コンタクト・ゾーンの特徴を一元的に捉える従来の研究を重層化する視点を提供する可能性を指摘した。

里における猟師と猟犬の交渉に着目すると、1日に1度エサは与えられるものの、猟犬はほとんどの時間を犬小屋につながれて過ごし、猟師は特別に猟犬の世話やしつけを行わないことが明らかになった。また、猟師が、飼育する猟犬を選択する際には、その猟師が求める性能をもつイヌを入手するために品種改良などを用いて取捨選択し、狩猟が行えなくなった猟犬は飼育されず処分されることから、猟犬を狩猟のための道具的存在として捉えている側面も否定できないことが明らかになった。そのような点に着目すると、里における両者の関係は、交渉自体が起こりにくく、ハラウェイが指摘するコンタクト・ゾー

ンの特徴のなかでも、権力を伴う階層的要素が最も顕著であることがわかる。

一方で、山での狩猟における猟師と猟犬の関わりは、全く異なった様相をみせる。狩猟時には、とくに獲物との格闘の際には、猟犬は勢子の命令に従わなくてはならない場面もあり、猟犬に対する身体規律が必要とされる側面も確認された。しかし、狩猟中の両者の関係は、階層的要素のみで成り立つものではない。事例考察から明らかになったように、狩猟の成功には、猟犬が主体性を発揮することが重要になる。すなわち、ここにおいて、ハラウェイが論じる人間とイヌによる主体性の相互形成が生じるといえる。ここで再びハラウェイの議論に立ち戻ることで、狩猟時に発揮されるイヌの「主体性」や「主体性の相互構築」が何を指すのかを明確化したい。

まずは、ハラウェイが、アジリティーのトレーニング時に相互形成される「主体性」をどう捉えているのかを確認したい。前述のとおり、先行研究は、コース上の障害物のある場所を、主体の作り変えが起こるコンタクト・ゾーンと捉える。それは、障害物を失敗せずに通過するためには、イヌと人間が互いを信頼し、相手の考えや思いに近づくことでコミュニケーションを図ることが必須だからであると主張する。そして、そのような障害物で失敗することをハラウェイは次のように説明する。ある練習時、ハラウェイとカイエンヌの「互いの心がぴったりと合い」、難しい障害物でも一つもミスがなかったが、最後の障害物を越えようとした際に、それがばらばらになった瞬間があったという。すぐに正しい位置へと戻ったが、互いはもはや「一体」ではなかった。それは単なる技術的なミスではなく、うまく走っているときにはいつも「結合していた異種の心—身体」が切り離されパートナーを喪失した瞬間であったという。「そんなときは、たいてい、コース上で起きたミスが互いの喪失の印となって現れた」と説明する [ハラウェイ 2013:348-350]。すなわち、練習中にミスが起こるのは、意思疎通がうまくいかず互いを理解できなかったためであり、失敗によって人とイヌは分断され、パートナーを喪失すると捉えていることがわかる。従って、ハラウェイが論じる、トレーニング時に生じる種=横断的主体の相互構築とは、練習時に人とイヌの息があってミスがない状態のなかで、相互の意思疎通を通じたつながりが形成されている状態を指すことがわかる。つまり、ここでのイヌの主体性とは、イヌが人間とのやりとりのなかで、ミスなく障害物を通過しうまく走るときに発揮されるものとして捉えられている。

ここで着眼したいのが、アジリティーを行ううえで、イヌがそのような主体性を発揮できるようになるために必要と思われるイヌに対する訓練についてである。なぜなら、イヌをどう訓練するかという点において、ハラウェイの論じるアジリティーの文脈におけるイヌの主体性と、狩猟時のそれとの差異が明確になるとと思われるためである。トレーニング中にイヌがミスなく走るためには、当然ながら、そのためのスキルをイヌが身につける必要がある。そしてそれは、イヌの身体的特性として備わっているものではないために、イヌはそれらを訓練によって身体に内面化する必要がある¹²。そのことは、ハラウェイがポジ

12 障害物におけるイヌのパフォーマンスには、基本的な形が12ほどあるとされ、例えばコンタクト障害物と呼ばれる場所では、色つきのゾーンにイヌの足指だけを接触させる必要があり、飛び越えてはいけないなどのルールに従う必要がある [ハラウェイ 2013: 315]。

ティブ訓練法を通じて、イヌが望ましいパフォーマンスをしたタイミングで適切に褒美を与えることで、その行動を定着させ内面化させる様子からも明らかである。つまり、アジリティーでイヌが主体性を発揮するためには、前提としてアジリティーという人間世界のルールや基準をイヌが身体に内面化する必要があり、それらをミスなく行えるようになるまでは人間との意思疎通も起こらないと捉えられていることがわかる。ここではイヌは、前提として人間の側に取り込まれなくてはその主体性を発揮できない。

一方で、本稿の対象となった狩猟時における猟犬の主体性とはどのようなものだろうか？事例からは、鋭い嗅覚などを用いて獲物の居場所を突き止めるなど、イヌのみが得ることができる獲物の情報を猟師に伝達することをはじめ、獲物の追跡、格闘、捕獲まで、猟の重要な役割の大半をイヌが担うことがわかった。また、イヌが猟師のもとへと獲物の居場所を知らせに戻る事例からは、イヌは人間の指示を受けるのみでなく、イヌがその場の状況を判断して行動することが、狩猟を成功に導くために重要であることが明らかになった。従って、狩猟の文脈においても猟師と猟犬が意思疎通を通じて、互いがパートナーとなり獲物を仕留めることがわかり、ハラウェイの論じる種=横断的主体の構築がここでも確認できる。しかし、猟中にイヌが主体性を発揮するために、どのような訓練が行われるのかという点に着目すると、ハラウェイの論じるそれとの差異が明確になってくる。

第4章では、狩猟のためにイヌを特別に訓練することはなく、イヌにイノシシの肉や血を与えると味を覚え、自然に獲物を追うようになることを確認した。また、先に、獲物の発見から捕獲までの狩猟の重要な役割をイヌが担うことを指摘したが、そこでのイヌの主体性とは、猟師と意思疎通を図り能動的に動くことに加え、鋭い嗅覚や聴覚で動物を発見する、長時間山を走る、獲物に嘯みつき格闘するなど、イヌの身体的能力に関わる部分も含まれることがわかる。それらは人間にはないイヌの能力であり、猟師はそれらに頼ることで獲物を仕留めることが可能になるといえる。前述したように、狩猟時にはイヌの動きを猟師が管理する場面や、狩猟には、獲物の捕獲という目的のためにイヌの身体的能力を人間が利用するという側面があることは否定できない。しかし、猟師たちは、狩猟を行う一番の理由にイヌの活躍をみることをあげ、獲物を発見した際にもすぐに鉄砲で仕留めるのではなく、イヌが安全に格闘することを確認しながら最後のとどめとして発砲することからは、狩猟時にイヌのもつ身体的能力を引き出し活躍させるために、猟師は自身と獲物との関わり方を管理することで、イヌの主体性を発揮させる一面も狩猟にはあることがわかる。猟の際には、イヌと人が互いに身体を規律しながら、パートナーとして双方の主体性を構築しあうことが明らかになる。その点において、狩猟時のイヌの主体性のあり方は、ハラウェイの論じる、アジリティーのルールをイヌが身体に内面化し、ミスなく障害物を通過するときにはじめて立ち現れるイヌの主体性とは異なるといえる。

そして、5章3節では、間柏原地区Kさん(80代)の猟犬の逃走や怪我にまつわる語りを考察したが、ここでは、勢子にとって個々の猟犬は、ともに狩猟を行ってきたパートナーとして歴史を共有するものとして捉えられていることを明らかにした。ハラウェイが、アジリティーの競技者とイヌは、ともに異種間チームの構成員であり、トレーニング

を通じて互いに意味のあるものになると論じるように、狩猟においても、勢子と猟犬は、異種間チームとして共同で獲物の捕獲を試みることによって、互いに意味あるものになることがわかる。そのような相互の意思疎通が、猟中に猟犬が事故に遭うことによって途切れることで、勢子はパートナーを喪失する経験として捉え、個々のイヌとともに猟を行った具体的な記憶をそれらの思い出とともに語ることを明らかにした。猟中の猟犬の怪我が、里におけるそれと異なって猟師に捉えられる理由は、パートナーの喪失と関わることを指摘した。

以上の狩猟の現場の考察からは、猟中の猟師と猟犬の関わりにおいて、イヌは名前や個性をもつ能動的な主体となることが明らかになった。しかし、5章4節のコウザキ儀礼の事例からは、猟犬が猟中に事故で命を落とした場合、猟犬は、コウザキ様という神へと神格化し超越的な存在へと姿を変えることを明らかにした。コウザキ儀礼では、棚上げ風葬を通じて、猟犬の霊が石へと集約され、個々のイヌは、自宅の裏山に石となって一つずつ集められていくことを確認した。しかしKAさんの事例からは、ある特定の石をみて具体的なイヌのあり方を思い起こすことができるのは2世代前までであり、コウザキ儀礼とは、狩猟時における猟師のパートナーとしての個の猟犬が、神へと昇華する過程であることを指摘した。儀礼を通じて猟犬は、里と山を超越して猟師の共同体を支える存在としての地位を獲得するといえる。

以上の本稿の事例考察からは、ハラウェイが、イヌと人間の交渉が起こるコンタクト・ゾーンを一元的に捉えたのに対し、椎葉村においては、同じ両者の交渉であっても、空間の移動を通じてそれらの性質が全く異なるものに変化することを民族誌的に描き出した。里においては、猟師と猟犬の階層的関係が最も顕著になり、山においては、猟犬は狩猟の成功には必要不可欠な猟師のパートナーとして立ち現れることが明らかになった。そして、猟中に生起する個として主体性を発揮するイヌは、猟中に命を落とした場合には神へと神格化するなど、里と山の領域を猟犬が往環することによって全く異なる存在へと「変身」する様子が明らかになる。

<謝辞>

本稿は2016年に京都大学人間・環境学研究科に提出した修士論文の一部に、加筆修正を加えたものである。延べ11ヶ月の長期に渡り、椎葉村の方々、とくに猟師の方たちには大変お世話になりました。また論文執筆のために多角的なコメントを下された文化人類学分野の先生方、院生の方々、2名の査読者、そして北海道大学の近藤祉秋さんには深く感謝を申し上げます。

<参考文献>

- 池谷和信 1989 「カラハリ中部・サンの狩猟活動——犬猟を中心にして」『季刊人類学』20(4): 284-332。
- 合原織部 2016 「「害獣」を仕留め山の神に捧げる——宮崎県椎葉村の害獣駆除の現場より」シンジルト編『狩猟の民族誌——南九州における生業・社会・文化』熊本大学

pp.191-204.

- 椎葉村編 1944 『椎葉村史』 椎葉村。
—— 2012 『宮崎県椎葉村——村勢要覧資料編 2012』 椎葉村。
田淵実夫 1993 「ちちしろ水」『動植物のフォークロア』 谷川健一編、三一書房。
ダナ・ハラウェイ 2013 『犬と人が出会うとき——異種協働のポリティクス』 高橋さきの
訳、青土社。
千葉徳爾 1969 『狩猟伝承研究』 風間書房。
—— 1990 『狩猟伝承研究 補遺篇』 風間書房。
永田りさ 2016 「猟犬の役割——命がけて闘う猟犬」 シンジルト編 『狩猟の民族誌——
南九州における生業・社会・文化』 pp. 熊本大学 42-53。
永松敦 2000 「銀鏡神楽の猪奉納と鎮魂儀礼」『東北学』 3:178-187。
—— 2005a 『狩猟民俗研究——近世猟師の実像と伝承』 法蔵館。
—— 2005b 「九州山間部の狩猟と信仰——解体作法に見る動物霊の処理」 池谷
和信・長谷川政美編 『日本の狩猟採集文化——野生生物とともに生きる』 世界思想社
pp.174-205。
野本寛一 2004 『山地母源論 1 ——日向山峡のムラから』 岩田書院。
柳田國男 1989 『柳田國男全集 5』 筑摩書房。
山口保明 2001 『宮崎の狩猟——その伝承と生活を中心に』 鉦脈社。

096

- Haraway, Donna 2007 *When Species Meet*. Minnesota: University of Minnesota Press.
Kohn, Eduardo 2007 How Dogs Dream: Amazonian Natures and the Politics of Transspecies
Engagement. *American Ethnologist* 34:3-24.
Marvin, Garry 2005 Disciplined Affections: The Making of an English Pack of Foxhounds. In John
Knight ed., *Animals in Person Cultural Perspectives on Human-Animal Intimacies*, Oxford:
Berg, pp.61-78.
Ogden, Laura A., Billy Hall & Kimiko H. Tanita 2013 Animals, Plants, People, and Things: A
Review of Multispecies Ethnography. *Environmental and Society: Advances in Research* 4: 5-24.
Pratt, Mary Louise 1992 *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London: Routledge.
Sundberg, Juanita 2006 Conservation Encounters: Transculturation in the 'Contact Zones' of
Empire. *Cultural Geographies* 13: 239-265.
Tsing, Anna Lowenhaupt 2004 *Friction: An Ethnography of Global Connection*. Princeton:
Princeton University Press.

インターネット資料

椎葉村ホームページ <http://www.vill.shiiba.miyazaki.jp/> 2016年8月29日閲覧。

**The Metamorphoses of Hunting-dogs:
Trans-species Engagements of Hunters and Hunting-dogs in Shiiba, Miyazaki**

Oribe GOHARA

Keywords: hunting-dogs, hunting, trans-species relations, villages and mountains, boundary crossing movements

The purpose of this paper is to examine the natures of trans-species engagements between hunters and hunting-dogs that have been observed in the two distinctive domains of a village and a mountain in Shiiba, Miyazaki. It also investigates how the conception of the subject has been co-constitutively made by the entanglements of those species in these domains. This study aims to contribute to expanding the existing knowledge of two different areas of studies; folklore studies focusing on hunting culture and hunting-dogs in the Kyushu area, and those studies focusing on human-dog entanglements from the perspectives of multispecies ethnographies.

The folklore studies mentioned above have pointed out that dogs play the most important roles during hunting. However, it could be argued that those studies only focus on the roles of dogs within the context of hunting. Thus, a further investigation is needed to learn about the natures of relationships that hunters and dogs have in everyday lives in a village domain.

Recent multispecies ethnographies focusing on the relations between humans and dogs have introduced the concept of ‘contact zone’ to analyze the space where those relations emerge [Haraway 2007]. Those studies consider ‘contact zone’ as a space where the selves are co-constitutively made through the interactions of humans and dogs; however, in order for different kinds of beings to live together in such a space, hierarchical relations are also involved. This study shows that the concept of ‘contact zone’ could be also applied to the place where hunters and dogs’ relations emerge in Shiiba. However, this study argues that the concept of ‘contact zone’ largely differs when it is applied to human-dogs’ relations as they exist in the village domain and in the mountain domain. In that sense, it could be argued that folklore studies and multispecies ethnographies above have both treated human and dogs’ ‘contact zone’ one-dimensionally. Instead, by examining their entanglements through the topics of feeding dogs, actual hunting practices, injuries and the death of hunting-dogs, Kouzaki ritual, it will show that dogs become very different existences by crossing the boundaries of the village and the mountain.